

# 3-1編集企画体制への道(3)

企画力、編集力、出版力(上)現状分析

代表取締役 吉田 隆

本作りの物語はひとまず終え、編集企画部の現況を概括し、未来の物語創造への備えとしたい。19期の出版部門の売上は、昨年対比2千万円増の7億5千万円を計上した。15期から5期連続の増収、4期ぶりの増益も果たした。出版部門は、20期以降に向け順調であるかのように見えるが、編集企画部、営業部ともに夫々不安を抱えたままのスタートでもある。特に、編集企画部の課題は、出版社の心臓部門ともいえる企画力、商品開発力が停滞傾向にあると思える点にある。そう思う根拠は、理化学系、ライフサイエンス系以外の領域への挑戦が弱いこと、'光触媒' 'イオン性液体' '大容量キャパシタ' '色素増感太陽電池' など速報性が求められるテーマで、ことごとく同業他社の後塵を拝していること、6、7年前の'抗菌'や'防脱臭'など、泥臭いぶし銀の企画が姿を消していることなどが上げられる。業績が好転した後、一転、急降下という事態を避けるためにも、こうした傾向に何らかの手を打つ必要がある。

### ●超大型化の功罪

現在、編集企画部のスタッフ数は10名である。ブッカーズ社を加えると13名の編集企画集団である。

理工系出版社としては、むしろ多い部類に入るのかもしれない。売上も、スタッフ数に比例して年々伸びている。出版部門の売上7億5千万円は、同業のS社、C社などが勢いにまかせて売上げたパブル期の実績に近い。勢いではなく、時間をかけて現在の陣容を固めたNTSの戦略は間違っていないと思う。だが、S社、C社のその後の苦境から、7、8億は、高額理工系書籍のニッチ市場がすでにピークに近いことを伺わせる。そうした事情もあり、私が停滞傾向と考える企画力、

商品開発力に対策を講じなければ、急降下の懸念が現実になる可能性は高い。停滞を招く要因の一つは、最近の大型本が1200頁を超える超大型化し、リーダーが精力の多くを事務作業にそがれ、若手教育や現場取材、市場調査などの企画に充てる十分な時間が確保できていないことである。超大型化の要因は、'薄膜' '界面' '表面' '分離'などの汎用性の高い大テーマを体系的に編集するためであり、12、3年ほど前から大型本の自主発刊路線確立のために積極的に取り組んできた、こうした体系的な大型本の新訂、改訂の時期に相次いで差し掛かっていることもある。だが、新訂版、改訂版の売上は旧版の70%止まりである一方、旧版から改定にいたる期間の技術進歩による応用分野の広がりや増ページを余儀なくされ、製作コストが30%ほど上昇する。大型本はえてして超大型化してしまうので、事業計画には慎重さが求められる。しかし、大型本は棋界を代表する先生方との貴重なネットワーク構築の場であり、NTSの顔として市場の評価も定着するなど貢献度も高い。

評価点は、テーマ自体はニッチではなく大手出版社とも競合するにも係わらず、内容の情報量で大手の同系書籍を圧倒するからである。大手は、NTSの半分の600頁ほどで大テーマの体系化を実現しようとする。1200頁では、書店価格の上限4万円前後の価格設定ができないからである。600頁、4万円と1200頁、6万円を比較し、読者は情報量で圧倒する後者を選択するのである。

今後、リーダーは内容、販売、コストのバランスのとれた大型本の商品開発に率先して努めると同時に、市場調査、現場取材を通しての新分野開拓、さらに若

手の育成などにも真剣に取り組んでもらいたい。

### ●ネット時代の功罪

企画力、商品開発力の停滞を招く一つの要因は、ネット情報に限らず、新聞、雑誌などの他メディアに情報源を依存しすぎることである。こうしたメディアを活用する場合、下記の点に留意しておく必要がある。そもそも企画は、著者の直感的なひらめきや感動の中に源泉を持つ。それが研究者であれ、技術者であれ、いわば仕事のエポックであり、焦点であり、著者や出版社がその直感や感動を誰かに伝えたい、一押ししたいと思うときに企画は生まれる。プロの企画者とはそうした源泉に出会うチャンスを逃さない人であり、プロの編集者はその感動の伝え方に優れた人である。ネットや新聞、雑誌などの他メディアに属する人たちも、そうした企画者、編集者であり、私たちと同じ生業(なりわい)に従事する人たちである。メディアを利用するということは、いわば同業他社の仕事の後を追うことでもある。出版というジャーナリズムの一翼を担うものとしては、常に彼らに先駆けて現場に足を運び、スクープをゲットすることを心がけておきたい。

### ●真の要因

さて、企画力、商品開発力の停滞を、大型本の超大型化とネット情報など他メディアへの依存という、ある意味、時の必然の流れの中で述べ、その対応策を考えてきた。しかし、真の要因は実はもっと根が深いように思われる。今回は、同業他社の後塵を拝していること、泥臭いぶし銀の企画が姿を消していることなどの理由とその究明に入りたい。

### ●編集後記

暑い夏がきた。今年は空梅雨で、蝉の泣き声が身にしみる日が続いている。1983年8月6日、この日も暑かったのを記憶している。腹部に違和感を感じ、早朝入院。「明日は、日曜日だからこのまま生みましょう。」実家の母に連絡をし、陣痛促進剤を飲み出産を待つ。何を思ったのか、夫は「ビデオの録画予約をしてくる」と自宅へ戻ってしまった。後日尋ねると、ゴジラの映画の録画だったそうで、ちょっとむかつく。この日は広島原爆記念日、陣痛を我慢しながら見ていたテレビの番組は、その特集が多かった。鼻の穴からスイカどころではない、陣痛の痛みに「早く生まれて」と必死に叫んでいた。20時50分無事男誕生。世界各地から戦争の話題が毎日のようにメディアを通して、知らされる。日本で平和を痛感しながら、地雷除去ロボットのことを考える。こんな形で、日本の技術が陰ながら頑張っているんだなと。(あした)

### ●編集部からのお願い

NTSニュースでは読者の皆様からのお便りや投稿をお待ちしております。また、開催予定の勉強会・イベント等、掲載をご希望される方は下記宛までご連絡ください。  
〒113-8755 東京都文京区湯島2-16-16 (株)エヌ・ティー・エス「NTSニュース」係  
FAX: 03-3814-9152 E-mail: k-kunimoto@nts-book.co.jp

### NTSニュース

2004年8月号(通巻66号)  
2004年8月3日発行